東京帝國大學經濟學會

經濟論叢

第二十卷　第四號

大正十四年四月一日發行

論叢

土地國有に關する諸說概評……法學博士　田島錦治

フッサールの現象學……文學博士　米田庄太郎

日銀物價指數の研究……法學士　汐見三郎

御家人の特質……文學博士　三浦周行

時論

物價と租稅の不公平……法學博士　神戸正雄

說苑

朝鮮の雜種農業……法學博士　河田嗣郎

貨幣の對內及び對外價値の變動と貿易並びに爲替との關係……經濟學士　谷口吉彥

雜錄

統計的研究に於ける選擇意思……經濟學士　岡崎文規

海運同盟の研究に關する參考資料に就いて……法學士　小島昌太郎

說苑

朝鮮の雜種農業

河田嗣郎

一　農業一般の改良

朝鮮現時の農業狀態の下に於ては、內地同樣に米作は最も重要なる地位を占めて居る。けれども北部地方に至つては、麥作や豆作や其他の雜種穀作が行はるゝのみならず、鮮內各地を通じて種々の特用作物が栽培せられ、又之を原料とする加工も農業附屬の業務として行はれて居る。今農家業務の本據とする所と之に附隨する所とより之を見て本業と副業との區別を立てるならば、固より米作が本業たる地方が多いが、麥作の如きが本業たる地方も少からず、又特用作物の栽培を以て本業とする所もないではない。從て朝鮮に於ける雜種農業は一概に之を副業と見るを得ないけれど、大體に於ては副業的業務と見て差支ない。

元來朝鮮の農村は內地の農村以上に昔時の自給經濟的な俤を留めて居るから、作物の種類や加工的作業の如きも、隨分其數が多い。卽ち朝鮮の產業狀態はまだ十分に資本主義の洗禮を受けて居ぬから、大工業の發達多く見るに足るものなく、工業の都會集中があまり表はれて居ないから、農村には、加工的な仕事もかなり多くの方面に涉つて行はれて居る。從て其の原料とする農產物の栽培もかなり廣く行はれて居るのである。たゞ併し乍ら其の仕事が如何にも幼稚で加工工業として田舍工業といふ面目を備ふるに足るもの少く、近時漸く奬勵保育の結果として種々の小工業と副業的加工業とが發達せんとする勢を呈し、農業方面に於ても之に關聯して種々の特用作物の栽培や養蠶畜產等の如きものやが著明なる發展を遂げつゝある次第である。そして其の變化が總督府の始政後に於て表はれ來りたるは言を俟たざる所で、その始政以前に於ける自給的な農村自然經濟が、始政以後種々の施設により改良進步を遂げつゝあり、其狀一般的にはまだ遙かに內地の實狀に及ばずとするも、成績の見るべきものあるは否み難い。

この指導奬勵のために總督府其他道廳などの行へる施設はかなり整へるものであつて、當局の努力も頗稱に値するものがある。先づ農業の改良指導の爲めに設けられたる機關としては、勸業模範場を擧げねばならぬが、之は明治三十九年以來種々の方面に涉つて種々の地方に設けられたるもので、現在では、水原の勸業模範場本場（普通農事、土地改良、畜產、農藝化學、植物病

理、昆蟲）を始めとし、其の西鮮支場（畑作物一般）木浦棉作支場、龍岡棉作出張所（在來綿作）、蠶島園藝支場、洗浦牧羊支場、蘭谷牧馬支場、蠶業試驗所、女子蠶業講習所等がある。其の任務とする所は、實地の指導を爲し、模範作業を行ひ、各種の試驗調査を行ひ、種苗種畜種禽の育成及び蠶種の製造を爲し、更には技術員及び當業者を養成するに在る。

それに又他方には或は半官半民のものとして或は純然たる民間のものとして、朝鮮農會だとか、郡島農會だとか、地主會だとか、各種の農業的組合例へば蠶業組合、棉作組合、畜産組合、果樹組合、種苗組合などといつたものが設けられて、農業者の自發的なる改良運動や奬勵運動が行はれ、講習會を開くとか、原料購入の斡旋、農具機械の貸付、共同作業の奬勵等が行はれることゝなつた。更には又品評會も開催せられ、生産物販賣の斡旋、販路の擴張等のことにも注意と努力とが行はれ、すべて其等のことは段々に有效性を增すことゝなつた。

斯くて國庫及各地方費は施政以來少からざる費用を投じて、朝鮮一般に於ける農事の改良に盡したのである。其の費用は國費の方に於て明治四十四年以來大正十一年に至る十二ヶ年間に千五百六十六萬餘圓、地方費に於て百八十八萬餘圓に上ぼつた。[1]

これ等の投資と官民協同の努力とは漸次其功を奏して、今や朝鮮の雜種農業と副業とは、米作農業と相並むで大いなる進步發達を遂げ得又現に遂げつゝあるが、然し何といつても主力が米作

1) 朝鮮總督府『鮮朝の農業』一一一頁

の奬勵改良に注がれつゝある爲めに、普通の畑作農業の如きは、前途尙ほ大いに改良の餘地あると同時に、養蠶、畜産、特用作物の栽培等に於ても尙ほ大いに爲さるべき所のものゝ殘り居るを否むことが出來ぬ。特に普通畑作の如きは養蠶や特用作物栽培の如きに比較しても、とかく輕視せられたり等閑に附せられたりする嫌ある次第だが、そが朝鮮農家特に北部地方や高原又は山間部の農家經濟に取つて甚だ重要の意義を有する。此の方面に於ける今後の改良事業は、興味あつて然かも頗る餘地多きものと見なければならぬ。

以下少しく普通畑作、畜産養蠶、特用作物、果樹栽培等について、其の概樣を叙し併せて批判的攷察を試みてみたいと思ふ。

二　普通畑作

朝鮮の普通畑作に在つては、麥類が農家の食糧として米と共に重要のものたる爲めに、やはり重きを爲して居る。其の植付面積は總督府の始政當初に在つては、畑全面積の三割五分に過ぎず又畓作面積は畓全面積の一割に達せざる有樣だつたが、始政後その畑作の擴張と二毛作として畓作の普及に關する努力の爲されたる結果、畓作は倍加し、畑作は三割强の增加を見ることゝなつた。そして同時に種子の改良施肥の增加等も奬勵せられて居るが、其の成績は米作方面に比較し

てまだ十分に擧つて居るとは謂へない。

麥作の中に在つては大麥が內地に於ける麥酒釀造用として需要せらるゝ所多く、又小麥は近年內地に於て生產少きに需要比年增加し從て外國よりの輸入多量なる爲めに大いなる問題を喚起せるに鑑み、共に其の栽培が奬勵せられて居る。そして優良種の試作等も行はれて居るが、其の作付反別は總作付反別に對し大麥に於ては約一割、小麥に於ては五分に過ぎざる現況に在る。

試に麥類栽培面積と收穫量との數字を示せば左表の通りである。[2)]

	年次	作付反別	指數	收穫高	指數	段當收穫量	指數
大麥	明治四十三年	五七五、九五七町	一〇〇	四、七四六、九三六石	一〇〇	〇、八二四石	一〇〇
	大正八年	八〇二、五一八	一三九	七、二七〇、二八〇	一五三	〇、九〇六	一一〇
	同九年	八二四、〇九九	一四三	七、三六六、八〇〇	一五五	〇、八九四	一〇八
	同十年	八〇七、四三六	一四〇	七、六一五、五〇〇	一六〇	〇、九八九	一二〇
小麥	明治四十三年	二四二、八九四	一〇〇	一、二〇五、九七二	一〇〇	〇、四九七	一〇〇
	大正八年	三四六、八九〇	一四三	一、六七〇、八二〇	一三八	〇、四八二	九七
	同九年	三五五、三七九	一四六	二、一四五、六四一	一七八	〇、六〇四	一二二
	同十年	三五七、三九一	一八八	二、一七〇、五二五	一八〇	〇、六〇七	一二二
裸麥	明治四十三年	三八、七四一	一〇〇	二五四、七一五	一〇〇	〇、六五七	一〇〇
	大正八年	五四、三七五	一四〇	三六一、二一六	一四二	〇、六六五	一〇一
	同九年	五三、〇一二	一三七	三四八、四〇二	一三七	〇、六五七	一〇〇
	同十年	五二、八二八	一三六	三九三、六六五	一五五	〇、七四五	一一三

2) 同書一二一頁

合計	明治四十三年	八五七、五九三	一〇〇	六、二〇七、六二三	一〇〇
	大正八年	一、二〇三、七八三	一四〇	九、三〇二、三一六	一五〇
	同九年	一、二三二、四九〇	一四四	九、八六〇、八四三	一五九
	同十年	一、二一七、六五五	一四二	一〇、一七九、六九〇	一六四

〇、七二四	一〇〇	
〇、七七三	一〇七	
〇、八〇〇	一一〇	
〇、八三六	一一五	

斯かる狀況であるから、今後著大なる麥作の擴張と改良との行はれざる限り、內地に於ける小麥の供給に關する問題の解決の如きにしても、餘り多くを朝鮮に期待することは出來難い。その內地移入は從來の所では內地の生產額と外國よりの輸入額とを合せたものが、內地の需要額に足らない所を補充する位の意味しか有つて居ない。その數量にしても年々數萬石から十數萬石の間を動いて居るに過ぎぬ。[3] 大麥については前述の如く釀造用として南鮮地方に『ゴールデン、メロン』一種の試驗的栽培が行はれて居るが、まだ十分なる見込は立ち難く、やはり將來の問題として殘されてあるやうに見へる。そして朝鮮に於ける麥作の前途を決する主なる要素は技術上に在つては肥料の關係これであり、經濟的には價格の關係これである。

次に重要なるは**大豆**である。大豆は朝鮮の氣候地味等に適して居るのみならず、元來肥料を要する所少き爲めに、朝鮮農家の粗放農作の下に在つても、比較的多量の收穫を擧ぐるを得る。さればわが始政以前からかなりの生產量を見、輸移出も行はれて居た。卽ち產額約三百萬石輸移出量約六十萬石と註せられた。然るにわが始政後は生產量も大いに增加し一ヶ年平均四百五六十萬

3) 本誌第十九卷第五號拙稿『小麥及小麥粉關稅引上是非』參照

石となり、百五十萬石は輸移出するを得る狀態となつた。

試にその生産狀況を見るに、大正元年以來の作付反別及收穫量左表の通りである。[4]

年次	作付反別	反當收穫量	收穫高	指數
大正元年	五八九、五四〇町	〇、六〇五石	三、五六六、六六二石	一〇〇
同　二年	六三五、五六三	〇、五六七	三、六〇三、〇一四	一〇一
同　三年	六六五、〇五一	〇、五四五	三、六二三、九二七	一〇二
同　四年	七一〇、二二九	〇、五六六	四、〇一六、五八八	一一三
同　五年	七〇八、四二七	〇、五九六	四、二二五、七一七	一一八
同　六年	七三七、六五七	〇、五八四	四、三〇九、六七六	一二一
同　七年	七四三、四六〇	〇、六五五	四、八六八、三二一	一三六
同　八年	七五八、五五三	〇、四三二	三、二八〇、六三一	九二
同　九年	七七一、〇五三	〇、六二一	四、七九一、一九七	一三四
同　十年	七八九、〇二七	〇、五九三	四、六七九、二八八	一三一
同　十一年	七九六、一〇五	〇、五六七	四、五一五、八三六	一二七
同　十二年	八〇五、八七八	〇、五七六	四、六四一、四六七	一三〇

大豆の生産は固より全鮮内に渉つて行はれるが、其の主産地はといへば北鮮地方であつて、品質も亦北鮮産のものを優れりとする。北鮮内に在つても咸鏡南北道はその名産地で、此の地方に生産されたるものゝ大部分は元山に出廻るゆへ元山大豆の名を以て知られて居る。卽ち米は南鮮を主産地とすると相反せる次第である。

4) 朝鮮殖産銀行調査課『朝鮮の大豆』二頁

然るに在來の朝鮮大豆はその品質良好なるに拘らず、異品種の混淆甚しく、大いに商品としての價値を傷けて居たから、優良品種の普及と種粒の選精とに關して種々督勵さるゝ所あり、近年に至つては優良種の作付反別も總作付反別に對し二割三分に及ぶに至つた。由來大豆は風土の影響を被ること大で所謂種變りをすること容易なれば種子の選粒は頗る重要である。從て又その品種改良は米の如く容易には行はれ難い。

そして又當局は商品としての大豆の價値を大ならしむる爲めに米穀及小麥檢査と併せて大豆檢査を行ふことゝし、大正六年以來輸移出され他道に搬出さるゝ際は檢査を行ふことゝした。檢査は品質、乾燥、異品種混入狀態、爽雜物の多少、異年度產大豆の混合の有無、容量及包裝の適否等について行ふ。

斯くて大豆が商品となりて賣買さるゝ際には普通の市場取引以外に貿易業者間には銘柄又は見本に依る現物相對取引行はれ、又穀物商組合市場が鮮內八ヶ所（京城、群山、大邱、釜山、鎭南浦、新義州、元山、木浦）に在つて、直取引及延取引を行つて居る。尙又仁川米豆取引所に於ては、競賣買の方法に依つて定期取引を行ひ、中々盛な賣買が行はれる。

そして鮮地外に輸移出さるゝ大豆の量は年額約百五十萬石其の價格貳千貳百萬圓に垂んたる盛況で（大正十年より十二年に至る三ヶ年平均）米に亞ぐ重要輸移出品たり、朝鮮全輸移出貿易額の

約一割に當つて居る。その仕向地は近時は殆んど內地と支那とに限られ、內地へ九割九分支那へ一分の割合である。內地に在つては大豆の生產量は大正七年より十一年に至る五ヶ年平均に於て三百九十萬石で、之に對し輸移入量は二百七十八萬石に及むで居る。卽ち全需要量に對する內地產の割合五割八分六厘殘餘の四割一分四厘が朝鮮及外國より移輸入さるゝ次第である。その輸移入量總計約二百七十八萬石中朝鮮よりの移入量は百二十五萬餘石で四割五分一厘に當り、支那、關東州、露領亞細亞及び其他の國々よりの輸入量合計百五十二萬餘石其の割合五割四分九厘といふ振分である。[5]

以て如何に朝鮮の大豆が朝鮮それ自身の農業に取つても、又內地の大豆需供上に於ても重要の地位を占めつゝあるかを窺ふことが出來る。その將來も大に有望なりとせなければならぬ。

麥及び大豆以外の雜穀に至つても大抵のものは朝鮮に栽培されてある。卽ち粟、稗、黍、蜀黍、玉蜀黍、燕麥び及蕎麥の類一として稔らざるは無い。就中粟は麥及大豆に亞ぎ重要なる作物であつて、其の生產はやはり北鮮地方に主として行はれる。作付面積は七七九、〇三八町步（大正十年）に及び收穫量は五百八十餘萬石（同上）に上つて居る。その耕種方法も古來他の作物に比しやゝ進步せる所あり。たゞ品種の選定、施肥、病蟲害の豫防驅除等に就いては多くの缺點あるため

5) 同書五一——六三頁

に、反當收穫量少く內地のそれに比し半量の收穫しか上らない。然るに粟は西北部地方に在つては農民の常食たるが爲めに、又その消費は廣く農民一般の間に行涉つて居る爲に、鮮地內の生產を以ては其の全需要を充すに足らず、年々少からざる輸入を支那方面より仰ぎつゝある。その數量年の豐凶に依り固より一定せないが二三十萬石より百萬石近くに及び、大正八年の凶作に際しては百五十萬石に及むだ。蓋し朝鮮農家の消費經濟に取つては粟の生產供給狀態はかなり重大な問題たるを失はず、米作を主とする農民間に在つても、高價なる米は之を市場に賣放つて安價なる粟を購入して食糧とする風は隨所に之を見る次第だから、粟の生產耕種に關する問題は內地以上に重大ならざるを得ない。

粟以外の雜穀に就いては特に記すべきものがないが、畑作の廣く行はるゝ朝鮮のことゝて、その生產は多量に上ぼるのだけれど、大抵農家の自家消費に用ゐらるゝ爲め、商品として意義を有するものは少い。

甘藷及**馬齒薯**も廣く栽培せられて居る。そして朝鮮の馬齒薯は內地產のものよりも美味なることは定評ある所で。右兩者とも近年指導奬勵の結果品質も改良せられ作付面積も大いに增加した。惟ふに此種の作物は農民の主食料の補充として農家經濟上には蔑視し難いものであるから、朝鮮農家の爲めには其の栽培の普及は甚だ好ましきことゝせなければならぬ。

三　特用作物—其一棉花

朝鮮に於ける所謂特用作物中最も重要のものとして先づ掲ぐべきは**棉花**である。棉花は古くより朝鮮に栽培せられ、わが施政前に於ける其の作付面積も四萬町歩を算する有樣だつたが、其の品種は改良の施されざる結果地木綿の原料又は中綿用としてしか用ゐられなかつた。然るに朝鮮の氣候風土は棉花栽培の有望なるを信ぜしむるに足るものがあるので、明治三十七年以來米國種陸地棉「キルグス、イムブルーブド」種を試作し、南鮮地方に適することが實證せられ、今や大いに奬勵されて同地方に廣く栽培せらるゝことゝなつた。そして西鮮地方は在來棉の適地なるが故に、その地方には之が栽培を奬勵し、又その品種改良、耕種方法の改善等につき種々施設せらるゝ所あるを見るに至つた。

朝鮮に於ける米國種棉花の栽培については、其の試作時代と第一期擴張時代と第二期擴張時代とを區別して攷へることが出來る。先づ其の試驗時代について見るに、我國に於ける棉紡績業の發達は棉花の生産供給に關する問題の重要なるを見るに至り、明治三十八年朝野の有志間に棉花栽培協會なるものゝ組織を促し、朝鮮に棉花栽培の有望なるを見て其の奬勵の氣運を造らんとするに至らしめた。そして農商務省亦之に援助を與へ終に韓國政府をして明治三十九年より向三ケ

年計畫を以て棉採種圃を設置する等のことを爲さしめた。そして其の種圃の經營は之を棉花栽培協會に委託し、同協會は更に之を統監府勸業模範場に委託したのである。斯くて全羅南道に棉採種圃十ヶ所設置せられ、後には京畿道外南鮮六道に渉り設けられた。

明治四十一年には韓國政府は臨時棉花栽培所なるものを木浦に設置して愈々棉花の栽培を奬勵することゝなり、明治四十三年この栽培所は勸業模範場木浦支場と改稱せられ、更に又大正元年以來は棉花採種圃の經營その他棉花栽培奬勵に關する事業は各道廳の所管に移さるゝことゝなつた。

之と同時に明治四十二年以來各採種圃管内に於て模範作圃を設け、翌年には各採種圃管内に一箇所乃至五箇所づゝ模範作圃を設けしめて其數二十二箇所に及び其翌年には更に之を四十五箇所に增加した。そして栽培成績は四十三年には反當二百十五斤を以て最多量としたるに過ぎなかつたが、翌年には三百四十八斤に達し、在來綿との差違著しく表はれ、新種栽培の氣運は十分に釀成さるゝことゝなつた。そして又民間の優良耕作人や功勞者を表彰する等のことをも併せ行ひ、優良種棉花栽培は追々に普及するに至り、その作付面積は創始當時四十五町歩に過ぎなかつたもの明治四十四年には三千四十三町歩に增し收穫實棉二百七十餘萬斤移出總量繰綿百二十萬斤を算するに至つた。

斯くの如くにして試作時代は過ぎ去り、試驗の結果南鮮地方は陸地棉の栽培に適することが實證されたので、明治四十五年總督は南鮮六道及勸業模範場に對して陸地綿奬勵の方針を示し、(一)陸地棉栽培の奬勵(二)種子の保存(三)栽培指導(四)栽培地擴張(五)在來棉の栽培改良(六)混棉及種子逸散の防止(七)生產棉花販賣の指導(八)綿作組合の設置等を以て實行要項と爲し之に關する方針を示し、愈々棉花栽培を實地農業の中に入らしむることゝしたのである。その結果各道に於て棉作奬勵行はれ、道及主なる郡に技術員を配置し、栽培者の間には棉作組合を組織せしめ、組合の手に依て棉花の共同販賣、種子肥料農具の共同購入、種子の採取、所要資金の低利融通等のことが行はるゝに至つた。尙ほ種子の配付、種子の更新等のことも、それぞれの機關を通じて行はれた。尙又棉花の販賣に關しては、全羅南道の如き棉花栽培の盛なる地方には、その販賣を以て業とする多數の商人表はれ、此等商人は、或は在來綿と陸地綿との混合を行つたり、或は綿花に水分土砂等を撒付したり、或は不正衡器を用ひたりして、種々不正の手段を弄し、其弊一面には純良種子を得るの困難を來して栽培上に及ぶと同時に他面には栽培農家の利得を傷くる所大なるものあるを見たので、道長官の指導監督の下に棉作組合をして所謂指定販賣を爲すことにせられた。指定販賣とは繰綿工場を有する會社又は商店を買受人に指定し、棉作組合より直接に之に販賣を行ふものであつて、其の取引價格は大阪市場に於ける繰綿相場を基礎とし一定の計算方式に依て之を算出

し、一定の日時及場所を指示して栽培者をして生產品を持寄らしめ、技術員その品質を鑑別し之に等級をつけて、賣買を行はしむる方法をいふのである。此の方法は大正二年十月より實施されたのだが、その方法に多少の缺陷あるを免れなかつたので、大正六年に至つては全羅南道の如きは、之を或期間內に出廻る棉花の先物競爭入札に依る共同販賣の方法に改め、指定買受人を廢めてしまつた。他の道もぼつ〳〵之に倣ふことゝなつた。

右の期間は卽ち第一擴張期を爲すのだが、大正元年より同七年に至る其間栽培面積は大正元年の七千三百町步より七年に於ける九萬四千町步に達し、收獲は七百二十一萬斤より千七百二十二萬斤に增加した。在來綿は其間却つて耕種面積も收獲量も減少した。

次に第二期擴張計畫は大正八年より向十ヶ年を期して行はるゝことゝなつたのであつて、作付反別陸地綿十萬町步在來綿三萬五千町步を擴張し、在來の作付反別と合せて總作付面積二十五萬町步と爲し、收穫量に於ては實綿約二億五千萬斤を得んとする。そして生產棉花の半量は之を朝鮮內に於て使用して棉花の自給狀態を造り出すと共に、殘餘の半量を內地に移出して十萬俵以上の供給を爲さんとするものである。

この計畫に基き棉作の擴張を爲さん爲めには、熟田に於ける年々の新規作付に對しては、種子の半量卽ち一反步につき七斤半に相當する補助金を地方費に補給する。そして林野、未墾地を開

發して棉作地と爲したり、灌漑不良にして旱魃を被ること多き水田を畑地と爲して棉の作付を爲す者に對しては、前者には初年の栽培肥料代の約半量に相當する金額反當一圓四十錢見當のものを交付し、後者には、一反歩につき五十錢を給付するのである。

そして又栽培法の改良の爲めには、技術員を增置し、種子の更新を行ひ、肥料の共同購入の斡旋を行ひ、以て十年後に於ては反當收穫量を陸地棉に於ては平均百五斤、在來棉に於ては平均九十五斤に達せしめんと期する。尙ほ指導里を設置し、大正十一年度より棉作の集團せる里洞を指定して之に充て、技術員をしてその栽培を指導せしめ又栽培者に肥料代を補助して模範里洞として指導的地位に在らしめんとする。そして其の成績の擧がるに連れて漸次模範里洞の數を增すものとする。次に又棉作組合に對しても其の補助の爲めに、國稅たる戶稅家屋稅を地方費の財源として道に移付し、以て棉作組合の活動を十分ならしめんとせられて居る。更に又棉作に關する基礎的試驗を行はん爲めに、勸業模範場木浦支場の事業を擴張し、その試作田を擴張し、技術員の養成を爲す等のことが行はるゝに至つた。

この第二期計畫は目下尙ほその進行中にあるが、既往の成績を見れば、大正八年の騷擾に引續き九、十年と經濟界一般の大不況期に入りたる爲め、一時事業の挫折を見たが、大正十一年以來頽勢を挽回して來た。そして此の棉作の指導奬勵の爲めに國庫は年額三十萬圓の支出をなし、關

係地方亦之に地方費を加へて少からざる經費を投じて居る。

以上示す所は[6]朝鮮に於ける棉作の沿革、その發達の狀況及び現狀の概要であるが、之を一般的に見て朝鮮に於ける棉作はかなり有望の業務たるを否み難いやうである。蓋し先づ氣温の關係に於ても、朝鮮は之に適するを謂ひ得られる。卽ち棉の發育に適する氣温は或は平均十八度以上を要すとせられ、或は十九度乃至二十七度を要すとせられるが、朝鮮の氣温は棉の發育期たる五月より九月迄の間に於て城津以南は平均十八度以上に達し、又夏期には適宜の降雨あり秋收期には日照多く又氣候乾燥なるを以て、甚だ都合が好い。併し陸地棉は在來棉に比し晩熟で高氣温の持續を要するから、鮮地內に在つても秋季氣温の急に下降する地方には適せない。從て其の栽培は南鮮地方に限局せられる。然かも又埃及棉や海島棉や印度棉やは從來試驗の結果霜害を被る恐多く、旣述の如く陸地棉『キングス、インプルーヴド』種が最も好く南鮮地方に適することが確められた。そして此種の栽培の行はれ難い西鮮地方は在來棉の適地たることが昔から實證せられてある。

然らば在來棉と陸地棉との異同はといふに、前者は纖維は强靭だが、毛脚短くて粗剛であるから、地木綿用として又中綿用としては喜ばれるが、現時の機械紡績原料には適せない。又反當收穫量も少く（陸地綿反當生產量二六五斤　在來綿反當生產量一六六斤）繰綿步合も少い。（陸地綿三割五分　在來綿二割五分）然るに陸地棉は纖維長く且

6) 朝鮮總督府殖產局『朝鮮の特用作物並果樹蔬菜』――――七頁
『朝鮮の農業』四四――五一頁
全羅南道廳編『全南之棉花』參照

捩曲多く紡績原料として適當なるに加へて、收穫量も繰綿歩合も大である。たゞ併し乍ら在來棉は長き年月に渉り朝鮮の地に適合して來たのだから、一般的に成熟完全で病蟲害少く、其爲纖維純白なるに反して陸地棉はまだ其の完全なるアックリマチゼーションが行はれて居ない爲めか、赤飛多く纖維の張力の弱い欠典がある。

然らば之を經濟的に見て棉花栽培を行ふと他の作物を作るのと何れが農家に取つて有利なりやと見るに、それは地方々々により又農家の異るにより一樣に謂ひ難いが、全羅南道の如く反當百斤以上の收穫を擧ぐるを普通とする所に在つては、一反歩の總收益拾五圓至貳拾圓として純收益五圓乃至拾圓に及び、他の對抗作物たる大豆小豆や粟稗等に比し、遙かに收益大である。慶省南北道の如きに於ても棉作の有利なるを否み難い。そして此等の地方では同じ棉作の中に在つても陸地棉を栽培する方が在來棉を作るよりも有利なるは言を俟たぬ。然るに在來棉しか作れぬ地方に在つては粟大豆等の對抗作物に比し必ずしも有利ならず、寧ろ大豆は最も有利で粟と棉とは伯仲の間に在ると信ぜられて居る。

一般的に棉の栽培には勞力を要する所多く集約作法を必要とするから、右等の優劣を攷へるには、勞力關係を重要視し、粗收入と純收入との上に於ける事情の相違を顧る必要がある。そして又勞力の剩つて居る農家と人手を雇はねばならぬ農家とに於て、利得計算に相違を生ずるを忘れ

てはならぬ。

併し大體に於て南鮮地方の如く陸地棉の栽培に適する所に在つては、棉作が有利なる農家の業務なるは爭ひ難き所である。從てその栽培が總督府や道廳の方針として奬勵せらるゝは、之を國民經濟上より觀たる棉花供給の上より攷ふるも、又之を各栽培農家の私經濟上より攷ふるも、至當のことゝ謂はねばならぬ。然るにたゞ一つ茲に注意を要する所のものは、棉花の如く世界的市場を有し、その相場の變動もかなり激しく、又之を原料として使用する內地紡績業も其の景氣の一張一弛の狀況に變動常なきものに在つては、その栽培を爲す農家の經濟は、之が直接の影響を受け易く、爲めに其の業務に多少投機的な要素も入り易いから、その奬勵を爲すに當つては、一面あまりに農家經濟を之に偏局せしめないやうにすること、他方には其の販賣に組織を與へ又相場に關して多少之を調節する働を爲す所のもの在らしむるを必要とすること之である。

這間の關係は內地と朝鮮とを通じて一般的に養蠶に就いても之を觀る所だと謂へると思ふが、先づ第一に農家の經濟がたゞ收支計算上有利だからといふだけで、その方の業務にばかり偏局するに於ては、農家の經濟に甚だ彈力がなくなり、生絲や繭の相場の變動又は棉花の相場の變動に依て、農家經濟は頗る不安の狀態に置かれ、相場の高い時には好い代り、その安い時には大いに困ることゝならざるを得ず、兎角その經濟をして投機的分子を加味することゝならざるを得ざら

しめる。そして相場の低い年が二三年も續けば、農家は折角の桑畑や棉畑を又水田に變換するを餘儀なくせしめられ、漸く之を水田にした頃には又繭や棉花の相場が昂つて、再び之を桑畑棉畑にせなければならなくなる。斯くて農家は左つ右つして結局奔命につかるゝことゝもなる。私はこの事情については、信州あたりの農家があまりに養蠶專門になることなからんことを希望して居るのだが、朝鮮南部地方の農家に對しても、同樣に又あまり棉作專門に偏局せざらむことを希望する。

元來農家の經濟は今の所到底十分に資本主義的には行きかねる。餘りに收益計算一點張りで、工業家の之を爲すが如き經濟の立方をしては、農業の如く其の業務の固定性を帶びたものは、困ることが出來て來ざるを得ない。農家の經濟は利得の多からんことも必要だが、それと同時に米作もやれば畑作も行ひ、棉も造れば養蠶もするといふ風に、なるべく其の業務を複雜にするのが、その經濟の彈力强からしむ所以であつて、彈力の强いといふことが、農業の如く本來安全第一で安定を喜ぶことの大なるものをしては、最も其の地盤を確固ならしむる道である。種々の作物や業務が併せ行はれて居れば、一方の作物の相場の低安なることは他の作物の相場の高貴なることに依て補はれ、一方の業務の不況は他方の業務の好況に依て相殺せられ、農家としての一家經濟は經濟界の各方面の景氣を動かす波浪に依て搖がさるゝ所少くて、比較的安全に年々の業務

を行つて行くことが出來る。私は斯くの如くあるのが、農家經濟にはふさはしい狀態で、農家があまり金儲專門に傾くのは危險千萬だと信じて居る。

此の意味に於て南鮮地方の棉作奬勵の如きも、農家一戸々々については、斯くの如き偏局を來さないやうな注意を以て行はるゝことが、農家に對する親切な遣方だと信ぜざるを得ない。此の關係に於ても、私が曩に經濟上の國家政策と農家各個の經濟を確實に又豐富ならしむる道と、常に必ずしも一致せず、又兩者を共に顧慮して然るべき中庸の道の採つて進むことの必要なるを論じた點が、同樣に攷へ得られ同樣に當嵌る次第である。[7]

從て次には棉作奬勵の行はるゝに就いては、その栽培技術上の指導改良のみならず、併せて其の生產綿の販賣に關しても、十分之を組織化し、其の相場の變動を多少ともに調節するに足るべき仕組を造り、其働に依て農家經濟をして多少でも安定的ならしむる必要がある。幸に棉作奬勵については共同販賣其他に關する此の方面の施設が行はれて來たやうだが、更に一層之を組織的のものたらしむべき今後の努力と施設とは、其要なしとすることが出來ぬ。そしてそれは、たゞ獨り農生產者を商人の喰物たらしめず、その當然に獲べき利得を壟斷さるゝが如きことなからしむることの爲めに必要なばかりではない。實に前述の如く其の農家各個の私經濟上の安定を得せしむる爲めにも必要のことたるを忘れてはならぬ。從來とかく農業奬勵に關しては、その技術方

7) 本誌第十九卷第六號所載『食糧問題と朝鮮の米作』の冒頭の項參照

面のみが見られて、經濟方面の閑却さるゝ嫌あり、之を改むる必要の切なることは、機會ある毎に私の屢次これを論ずる所だが、棉花特に陸地棉の如く農家の自家用品たらず、主として商品たる性質を有するものゝ栽培經營を行ふに就いては、這間の注意の甚だ必要とせらるゝを、茲にも一言せざるを得ない。

私は以上二大重要點に關する當局と當業者との注意と努力と施設との十分に行はるゝことを條件として、南鮮地方に於ける棉作の前途の有望なるべきを思ひ之を祝福するを禁じ能はざるものである。

次に朝鮮に於ける特用作物として注意すべきは麻類である。麻類の中でも大麻が主であつて、衣服の材料として用ゐらるゝは勿論のこと、草鞋、漁網、綱等の原料として需要大である。其の栽培は累年增加の勢を示し、明治四十三年には其の作付反別一萬八千餘町歩なりしもの、大正十年には二萬八千町歩に增加した。そして其の栽培は自家用を主とし、且その耕種上には施肥を要すること大なるを以て、農家一戸當りの栽培面積は一反歩以内なるを例とする。そして其の品種も在來種を普通とし、未だ多く改良の施されたるもの無く、優良種の栽培面積は少い。その製麻法も原始的なる石蒸法を用ゐ居る有樣なれば、栽培の方面に於ても製麻の方面に於ても今後改良

の餘地大である。

苧麻は氣溫の關係上南鮮地方に限り栽培せられて居るが、近年支那より安價なる苧布の輸入行はるゝ爲め、生產減退の傾向あり。大正十年に於けるその栽培面積は千二百九十二町歩であつた。

麻類以外に在つては、**楮**（紙の原料）、**莞草**（莞席其他の原料）、**荏**（製油原料）、**胡麻**（食油原料）、**杞柳**（器物原料）等があるが、一々茲に說明する必要はあるまい。たゞ一言して置きたいのは**甜菜**である。之は在來朝鮮に栽培せられたものではなく、明治四十四年に初めて西鮮地方に試作せられ、有望なりと思はるゝまゝに漸次奬勵せられたものである。大正六年には平壤に朝鮮製糖會社の創立を見（大正八年大日本製糖會社に合併）大正七年以來は國費を以て平安南道、黃海道に補助を與へて試驗調査を行はしめ、又栽培農民に優良種子を配布せしむる爲め右二道に年額七萬五千圓の補助金を交付することにした。大正八年以來の栽培成績は作付面積約二千五百町歩、反當平均收量二噸、含糖步合一四乃至一五％といふことになつて居る。[8] 然し朝鮮に於ける甜菜栽培は現今尙ほ未だ試驗時代を脫せず、まだ確かな見込が立つたとは謂ひ得られない。製糖會社の如きも從て甜菜糖の製造だけでは立行き難き現狀に在る。そして甜菜栽培上には褐斑病の害が中々大きなやうであるから、一般的に見て其の前途は未定なりと見た方が誤ないであらう。要するに尙ほ大いに病害豫防や栽培法其他に就いて研究の餘地がある。

8) 『朝鮮の農業』三五頁